尺度遺跡

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一六―四

大阪府教育委員会

大阪府埋蔵文化財調査報告2016－4

尺　度　遺　跡

－動物愛護管理センター（仮称）建設に伴う発掘調査－

平成28年11月

大阪府教育委員会

尺　度　遺　跡

－動物愛護管理センター（仮称）建設に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

序　　文

大阪府農林水産部は、動物愛護管理センター（仮称）を地方独立行政法人大阪府環境農林水産総合研究所・食と緑の技術センターの隣接地に建設を計画しました。食と緑の技術センターはかつて大阪府農業技術センターと呼ばれ、古くから地域のランドマークとして広く府民のみなさんに知られています。この施設が所在する羽曳野丘陵およびその東側の扇状地にかけては、農林センター散布地、尺度遺跡、さらに複数の古墳などの存在が知られていました。しかし古くに研究棟などの施設建設や農地の造成などにより、大きく削平を受けており、これらの遺跡の実態は明らかではありませんでした。

尺度遺跡においては、近年開通した南阪奈道路の建設に先だって当該施設の南側で大規模に実施された発掘調査において、縄文時代から中世にいたる多くの遺構、遺物がみつかり広く注目を浴びました。

今回の調査区は、南阪奈道路に隣接する場所に当たります。幅１ｍの細長い調査区を約200ｍ、東西に設定したものです。全体的に大きく削平を受けており、遺物包含層はほとんど遺存していいませんでした。しかし、深く掘り込まれた溝や住居跡などの遺構などの発見によって、この地域の開発の歩みを解明する契機になるものと考えます。

この成果が地域の歴史を復元するための資料として広く活用されることを希望します。

調査にあたっては大阪府農林水産部、南河内農と緑の総合事務所、独立行政法人大阪府環境農林水産研究所食と緑の総合技術センターをはじめとする諸機関、諸氏の協力を得ました。文末ながら厚くお礼申しあげます。

また、今後とも本府の文化財保護行政にご理解とご協力いただきますようお願いいたします。

平成28年11月

大阪府教育庁文化財保護課長

星住　哲二

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府農林水産部の依頼を受けて平成27年度に実施した、動物愛護管理センター(仮称）建設工事に伴う、羽曳野市蔵之内所在の尺度遺跡の発掘調査報告書である。
2．現地調査は文化財保護課調査事業グループ課長補佐　橋本髙明の指導の下、同主査　山田隆一、専門員　広瀬雅信・小林義孝を担当者として実施した。
3．遺物整理作業は、同課調査管理グループ　総括主査　小浜　成、副主査　藤田道子、専門員　阪田育功を担当者として実施した。
4．本調査の調査番号は、15016である。
5．調査に要した経費は、大阪府農林水産部が負担した。
6．本書の執筆は第３章第４節を山田が、他を小林が行った。
7．本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
8．本書は、300部を作成し、一部あたりの単価は651円である。

凡　　例

1．調査にあたっては、国土座標第Ⅵ系を用いた。遺構平面図には、座標値をＸＹ軸について示した。
2．標高は、すべてＴ.Ｐ.(東京湾平均海面）値を使用した。
3．遺構番号は、地区ごとに、検出順に番号を付した。
4．本書掲載の遺物は、本文挿図・図版写真ともに共通した通し番号を付している。

目　　次

序文
例言・凡例
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 6
　第１節　調査区の設定 …… 6
　第２節　基本層序 …… 6
　第３節　検出された遺構 …… 8
　第４節　出土した遺物 …… 12
第４章　まとめ …… 17

挿図目次

第１図　調査地の位置 …… 1
第２図　周辺に分布する遺跡 …… 4
第３図　調査区配置図 …… 7
第４図　断面模式図 …… ９・10
第５図　１区の遺構平面図 …… 11
第６図　２区の遺構平面図 …… 11
第７図　１区の遺構断面図 …… 11
第８図　２区の遺構断面図 …… 11
第９図　４区の遺構平面図 …… 13
第10図　竪穴住居401平・断面図 …… 13
第11図　溝404断面図 …… 13
第12図　１区出土遺物実測図 …… 14
第13図　２区出土遺物実測図 …… 15
第14図　４区出土遺物実測図 …… 15

図版目次

図版１　検出した遺構（１区）
図版２　検出した遺構（２区）
図版３　検出した遺構（３・４区）
図版４　検出した遺構（４区）

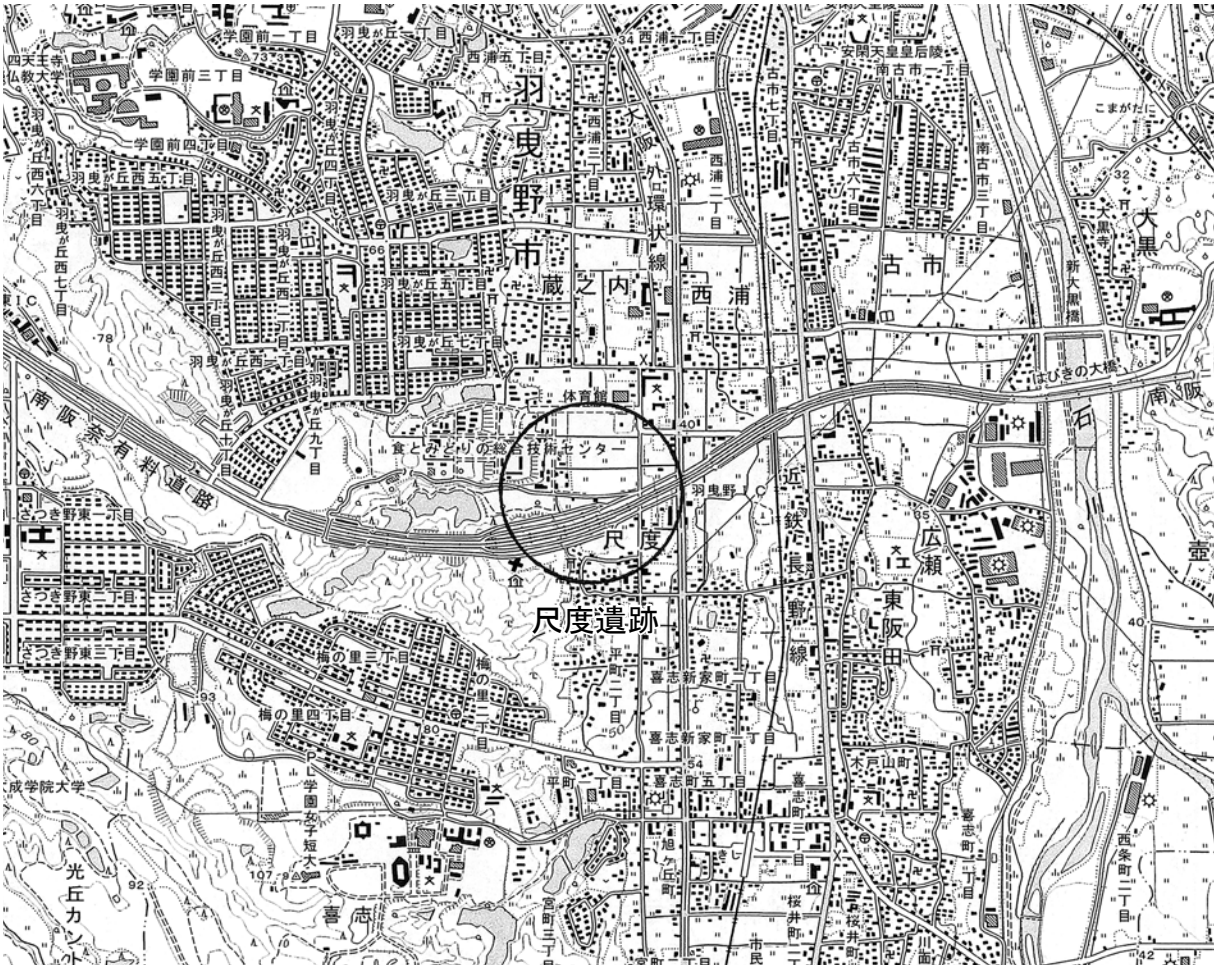
図版５　検出した遺構（４区）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　出土遺物３

第１章　調査に至る経過

大阪府環境農林水産部は、動物愛護センター（仮称）の建設を、羽曳野市尺度に所在する地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所の本部・食と緑の技術センターの敷地内に建設を計画した。建設予定地が、埋蔵文化財包蔵地（農林センター散布地、尺度遺跡ほか）にあたるため、事業を所管する動物愛護畜産課と文化財保護課は平成24年度に協議を行い、埋蔵文化財の状況を確認し、調査方針を立案するために確認調査を実施することで合意した。当該地は羽曳野丘陵の東側斜面と丘陵に刻まれた開析谷にあたっている。丘陵部はすでに食と緑の技術センターの本部をはじめ多くの施設の建設によって古くから大きく改変されており、開析谷の部分はこれまで調査の手が及んでいなかった。

平成25年４月に確認調査実施のための覚書を締結し、平成25年６月と８月の二回にわたって確認調査を実施した。６月には、南側の開析谷の底に当たる動物愛護センターの本館などの施設建設予定地の調査を実施した。８月は丘陵の斜面に当たる愛護動物の運動場所などの調査を実施した。どちらの地点においても遺構、遺物は検出されず、建設工事の実施に支障がない旨の回答をおこなった。

動物愛護センター本館などの施設建設予定地が農業大学校の研修農地などにあたっており、その移転



第１図　調査地の位置（S＝1/25000）

先である食と緑の総合技術センター北側の谷地形における遺構、遺物の有無の確認する必要があった。当該地に存在した施設の解体撤去工事に際して、立会調査を平成26年２月に実施した。遺構、遺物は検出されなかった。

平成26年３月に、動物愛護センター本館などの施設に国道170号（大阪環状線）方面から進入するための道路部分の埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての協議を行った。平成26年12月に進入路の経路などの計画が決まり、当該地の確認調査を実施することで合意する。さらに確認調査の結果に基づいて、遺跡の保存のために進入路計画の見直しを含め発掘調査の規模や方法についても協議することとなる。

平成27年３月に進入路の東部分の、同年４月に西部分の確認調査を実施し、広い範囲で遺構、遺物が発見された。同年５月に確認調査の結果により、進入路とそれに平行し設置される農業用水路建設予定地の全面において発掘調査が必要である旨の回答を行う。同年７月に動物愛護畜産課で進入路の設計が見直され、道路面をかさ上げするなど遺跡の保護のための配慮を加えた設計がなされ、発掘調査を農業用水路部分のみに限定して実施することで合意した。

以上のような経過を経て、平成27年11月・12月に発掘調査を実施した。

第２章　位置と環境

尺度遺跡は羽曳野市尺度に所在する。尺度遺跡が所在する南河内の地域は西を羽曳野丘陵、東を石川によって画される。石川に沿うように河岸段丘が断続的に形成されており、ここには弥生時代中期の集落群や古市古墳群をはじめ各時期の遺跡が多数分布している。

羽曳野丘陵の東斜面には開析谷が刻まれ、そこを流れる小河川によって形成された扇状地が丘陵に沿って広く形成される。さらに扇状地の東には氾濫原が広がる。従来この扇状地と氾濫原において確認された遺跡の分布密度は低い。尺度遺跡はこのような扇状地から氾濫原にかけて立地している。

石川と大和川の合流地点付近には巨大古墳によって構成される古市古墳群が展開する。古墳群と重なるように国府遺跡、船橋遺跡などの多くの官衙を含む古代の集落遺跡や西琳寺跡をはじめとする古代寺院、中世には守護所であった高屋城跡など多くの遺跡が分布する。この地域は古代中世を通じて河内の中心であった。

尺度遺跡の所在地は、この遺跡の密集分布地区の南方にあたる。石川と平行して河岸段丘上には東高野街道が走り、ここには多くの遺跡が分布している。喜志遺跡は二上山のサヌカイトを素材とするする打製石器を多く出土する弥生中期の集落遺跡である。喜志遺跡の北側には古墳時代の集落跡である東阪田遺跡、南側には中世の集落跡である桜井遺跡など顕著な遺跡が分布している。

粟ヶ池の築造年代は明らかにできないが、石川左岸にひろがる低地部の灌漑の中心であり、ここから北側の耕作地に給水している。この地域にみられる条里制とのかかわりが想定できる。

このように石川の河岸近くには多くの顕著な遺跡が分布しているが、それに対して羽曳野丘陵とその裾部に展開する遺跡の実態は必ずしも明らかではなかった。尺度遺跡の範囲内に位置する西浦銅鐸出土地が注目されるのみである。

尺度遺跡は古くから弥生時代後期の高地性集落として知られていた。大阪府農業技術センター（現・地方独立行政法人大阪府環境農林水産総合研究所食と緑の総合技術センター）の建設など丘陵部の大規模な造成によって、削平を受けたものと推測され、その存在を明確にすることはできない。

近年まで丘陵部は農業センター散布地とされ、丘陵裾部から低地部にかけて、尺度地区遺物散布地として周知されていた。そして農業センター散布地に含まれる丘陵の頂部に戸雁山古墳と天智の坂古墳がかつて存在したといわれている。

南阪奈道路が計画された1970年代には、（財）元興寺文化財研究所や（財）大阪文化財センターによって路線予定地の分布調査や確認調査が実施され、尺度地区遺物散布地の範囲が広がることが確認された。南阪奈道路の建設計画が本格化した1990年代後半から確認調査が実施され、その結果、東方に所在していた尺度遺跡と尺度地区遺物散布地を合わせて新たに尺度遺跡とされた。

当該事業に先立つ発掘調査が主に1996年から2000年にかけて（財）大阪府文化財センターによって実施され、尺度遺跡の旧石器時代から中世にいたる多様な性格の遺構・遺物が検出された。調査地は食と

1 雨ケ池古墳
2 ヒチンジョ池西古墳（大塚古墳）
3 塚穴古墳
4 善正寺跡
5 No48地点古墳
6 小口山古墳
7 鬼ケ池南古墳
8 峯ケ塚古墳
9 誉田白鳥古墳
10 前の山古墳（日本武尊陵古墳）
11 栄町遺跡
12 チンチン山遺跡
13 西琳寺跡
14 古市遺跡
15 石曳遺跡
16 埴生野南塚古墳
17 坂戸古墳
18 白髪山古墳（清寧天皇陵古墳）
19 白髪山遺跡
20 小白髪山古墳
21 高屋丘遺跡
22 高屋築山古墳（安閑天皇陵古墳）
23 高屋遺跡
24 八幡山古墳
25 高屋城跡
26 城山遺跡
27 大黒散布地
28 徳楽山古墳石槨
29 乃木寺北古墳
30 西浦古墓群
31 西浦遺跡
32 西浦ツヅミ田遺跡
33 大黒寺遺跡
34 大黒遺跡
35 駒ケ谷第１散布地
36 六ツ塚河原城古墳
37 蔵之内西古墳
38 蔵之内遺跡
39 蔵之内東遺跡
40 徳楽山古墳
41 蔵之内古墓
42 農林センター散布地
43 天智の坂古墳
44 戸雁山古墳
45 西浦銅鐸出土地
46 尺度遺跡
47 西浦東遺跡
48 東阪田遺跡
49 駒ケ谷遺跡
50 壷井第１散布地
51 平尾城址
52 平２号古墳
53 茶臼山古墳
54 平１号古墳
55 貴志遺跡
56 通法寺条里遺跡
57 貴志西遺跡
58 貴志南遺跡
59 宮神社裏山古墳群
60 粟ケ池遺跡
61 桜井北遺跡
62 桜井遺跡
63 貴志城跡
64 宮前山古墳３号墳
65 宮前山古墳１号墳
66 真名井古墳
67 宮前山古墳２号墳

第２図　周辺に分布する遺跡

『尺度遺跡Ⅲ』（（財）大阪府文化財センター調査報告書第110集）の図３に一部加筆

緑の技術センターの所在する丘陵部の南側に刻まれた開析谷から東の低地部に当たる。

旧石器時代の遺物としては、丘陵斜面からは国府型ナイフや翼状剥片などが出土している。

縄文時代の遺構、遺物は遺跡の東部で検出されている。縄文後期の炉跡や縄文後期や晩期の土器などである。

弥生時代の遺構の密度は低いものの広い範囲に遺構、遺物が分布している。とりわけ国道170号（大阪外環状線）付近の調査区で顕著にみられ、中期（Ⅱ様式）には土坑などが検出されている。後期には、円形の焼失した竪穴住居や土坑、水路が検出されており、この付近に集落跡が拡がる可能性が指摘されている。遺跡の東部では遺構密度は低く、この一帯に水田の存在が予想されている。

引き続く古墳時代前期初頭（庄内式期～布留式期初め）には大規模な集落が形成される。内部に掘立て柱建物をもつ方形区画を中心として、その周囲に方形の竪穴住居がみられた。方形区画を中心とする集落域は東西約280ｍの幅をもつ巨大なものである。

方形区画はほとんどが調査区外に出るが、１辺37ｍ前後の正方形のプランが復元されている。内部には２棟が並列した掘立て柱建物が３回建て替えられているのが確認されている。竪穴住居は周囲に溝を伴いさらに排水溝がのびている。竪穴住居は重複しており、同じ場所で建て替えがおこなわれたことがわかる。

古墳時代後期には、周辺の灌漑が整備され、広く耕作地として利用されている。また中世にも丘陵部を集水地とした灌漑施設が整備され、一帯が広く耕作地された。

以上のように、南阪奈道路建設にともなって実施された発掘調査の成果によって尺度遺跡の実態が具体的に明らかになった。

尺度遺跡周辺の丘陵部は早くから住宅開発が進み、調査資料も断片的であり、全体像を把握するのがむつかしい。しかし尺度遺跡の南方には前期にさかのぼる前方後円墳などが分布し、北側の丘陵部には古墳時代の終わり頃の古墳や古代の火葬墓なども所在している。これらを支えた集落のひとつが尺度遺跡であることは間違いない。

このような状況の中で尺度遺跡についての南阪奈道路の建設に伴う調査成果と今回の調査成果の意義は大きい。

第３章　調査の成果

第１節　調査区の設定（第３図）

調査区は、食と緑の総合センターの南側外郭を走る東西道路を拡幅して動物愛護管理センター(仮称)の進入路を建設するにあたって、進入路の北端に設置する水路部分に調査区を設置した。当該地は約50ｍごとに南北方向の農道が設置されており、それに規定されて長さ50ｍ、幅１ｍの調査区を設定した。西から東にむかって１区～４区とした。東端の４区は進入路の幅がひろがるために鍵の手の形状をとる。また、２区については南側の旧水路部分に調査区（２－２区）を設定し、遺構の広がりを確認した。

調査対象地は、本来西から東へ傾斜する丘陵の裾部とそれに続く低地部に当たる。いずれの調査区においても耕作地の造成工事により大きく削平されており、遺物包含層はほとんど遺存しておらず、地山面を大きく削り込んでいた。そのため４区の東端部をのぞいて深度の深い遺構が検出されたのみである。

第２節　基本層序（第４図）

丘陵の裾部に当る１区には谷地形が形成されており、調査時の現地表面の標高も２区より低い。２区から東にむかって３区、４区と次第に標高をさげていく。これは耕作地として造成される以前の本来の地形の状況を反映したものである。

１区は、耕作地造成時に、T.P.+40.60ｍまで地山層を削平し、その上部に厚さ30㎝前後の盛土を施して耕作面を造っている。遺構はすべて上部を削られた地山面上で検出された。１区西端部には大きな谷地形が存在した。谷地形の最下部埋土であるは黒色有機質土から、布留式前半期の古式土師器がまとまって出土した。谷地形の埋没土の最終段階で形成された遺物包含層（５褐灰色粗砂・小礫混じり粘質土）からは６世紀後半の須恵器が出土している。

２区においても、すべての遺構は地山面上で検出された。地山面の上層はすべて耕作地とされる過程で形成されたものである。１区、３・４区においては地山層を平坦に削平して現在の耕作地を造成しているが、２区では現在の耕作地の以前の耕作地の時点での耕作土層が遺存している。地山面の上層は基本的に現在の耕作土、盛土層、旧耕作土、地山層の順に堆積している。

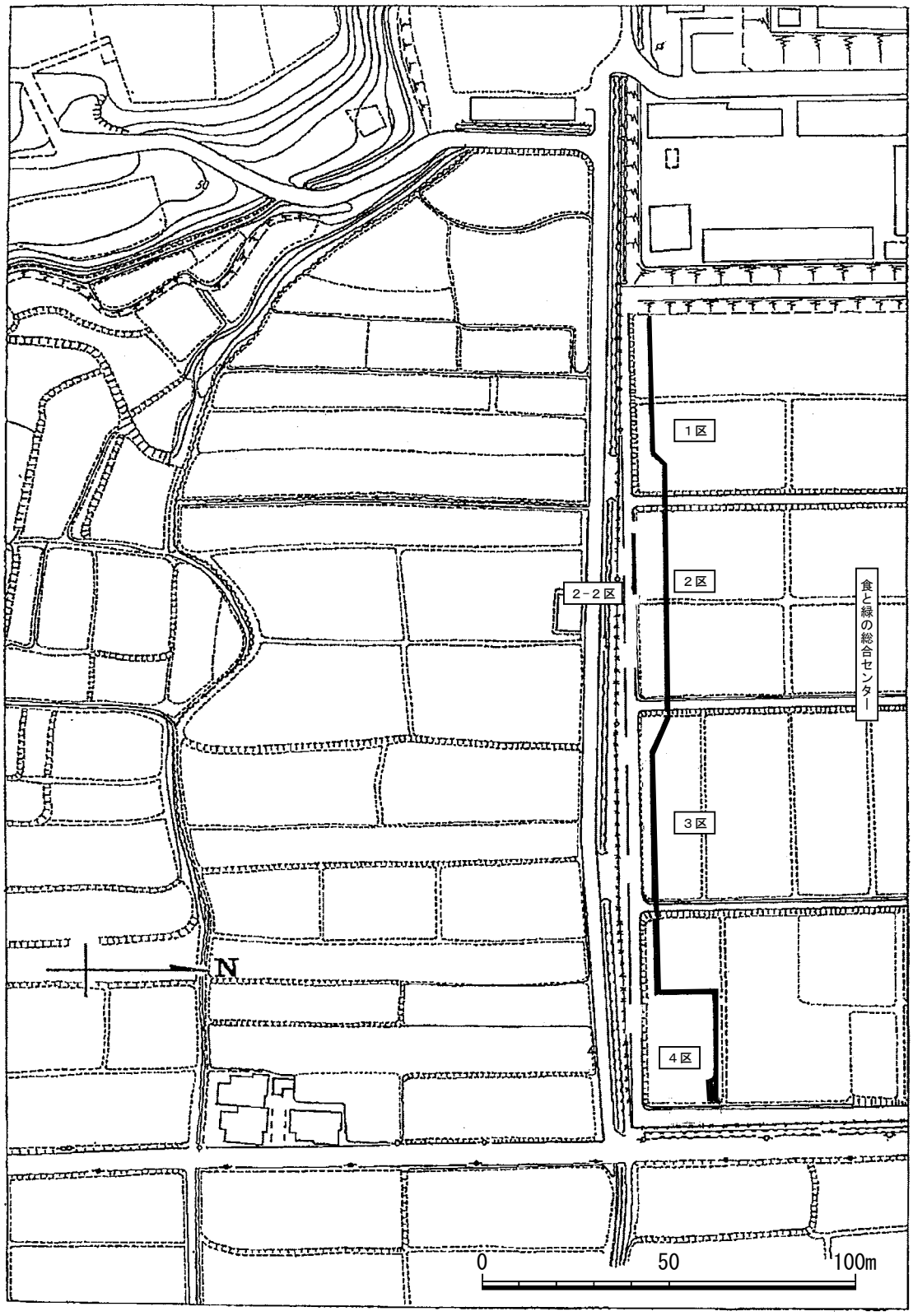
３区は、耕作地造成時にT.P.+41.00ｍまで地山層を削平し、その上部に厚さ５㎝前後の盛土を施し耕作面としている。調査区東部においては谷地形が形成されており、そこに何層かに分けて土砂を入れて、耕作面の高さをそろえている。

４区では、耕作地造成時にT.P.+39.70ｍまで地山層を削平し耕作面を造り、その上部に耕作土をおいている。すべての遺構は、上部を削られた地山面上で検出している。

第３節　検出された遺構

①　１区で検出した遺構

１区においては上部を大きく削平されており、多くの遺構もすでに失われていたと推測される。わず



第３図　調査区配置図

かに西端の部分で溝やピットなどの遺構が遺存していた。また西端部では谷状の地形が検出され、その上部に６世紀後半の遺物を含む遺物包含層が一部遺存していた。

溝101（第５図、第７図、図版１）　幅約50㎝、深さ約30㎝を測る。南西から北東方向に走る。４層に分けられる埋土は、すべて自然堆積層で、下層から上層へ、シルト質から粘土質に変化していく。下層ではラミナも観察され、いずれの土層も水の流れによって形成されたものである。

溝102（第５図、第７図）　幅約40㎝、深さ約20㎝を測る。北西から南東方向に走る。埋土である黒褐色粘質土は滞留した水によって形成されたものと推測される。

溝101と溝102はほぼ直行して流れ、調査の南方で合流していたと考えられる。

②　２区で検出した遺構

２区では南北方向に走る４条の溝もしくは溝状の遺構を検出した。また、調査区から約7.5ｍ南側に設置されていた既設水路の撤去時の立会調査において、一部の遺構のプランを確認することができた。これによって遺構の広がりと性格を明確にすることができた。

溝201（第６図、第８図、図版２）　幅約2.0ｍ、深さ約1.9ｍを測る。方位を北から東に振って連続する。本来の等高線に平行して掘削されたと推定される。60度を超える角度の急傾斜の法面をもつ。堆積土は細砂を基本として、植物遺体を含む有機質層が互層となる。細砂層の一部にはラミナを確認できる部分もある。本遺構が機能していた時点では、恒常的に水が流れていたと推測される。最上層は黄色褐色土と黒褐色土のブロック土で人為的に埋められていた。

溝201は急傾斜の法面をもつ深い溝であり、地形に平行して造営され、溝の底には常に流水があったのである。出土遺物から６世紀後半の時期が与えらはれる。

溝202（第６図）幅約30～65㎝、深さは北端で浅く、南端で７～８㎝を測る。埋土は黒褐色土。溝ではなく、細長い落ち込み状の遺構の可能性がある。

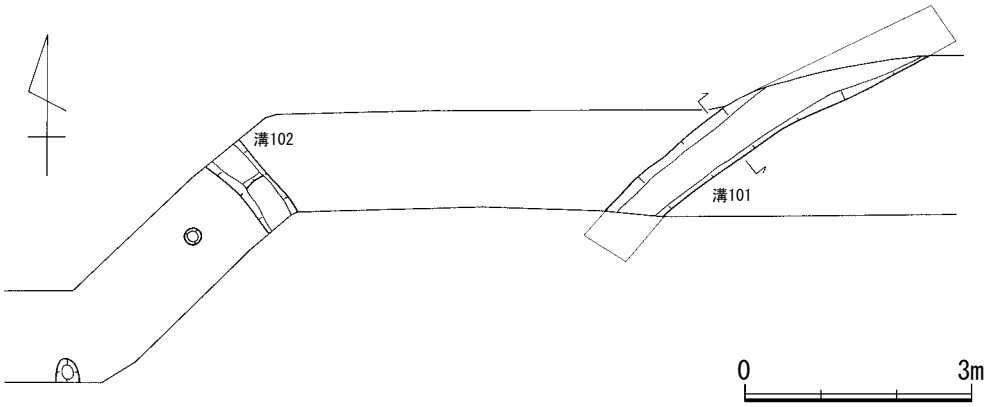
溝203（第６図、第８図）　幅約4.5ｍ、深さ約20㎝を測る。なだらかな傾斜の法面をもつ。埋土は淡褐色土であるが、断面を観察すると西部に褐色土を埋土とする部分があり、２条の溝が重なっている可能性がある。南側の立会調査部分では検出できなかった。

溝204（第６図、第８図）　幅約1.5～2.0ｍ、深さ約30㎝を測る。なだらかな傾斜の法面をもつ。黒褐色土を埋土とする。南側の立会調査部分では幅６ｍ以上に広がっている。溝ではなく、湿地状の遺構である。出土遺物から弥生時代にさかのぼる可能性がある。

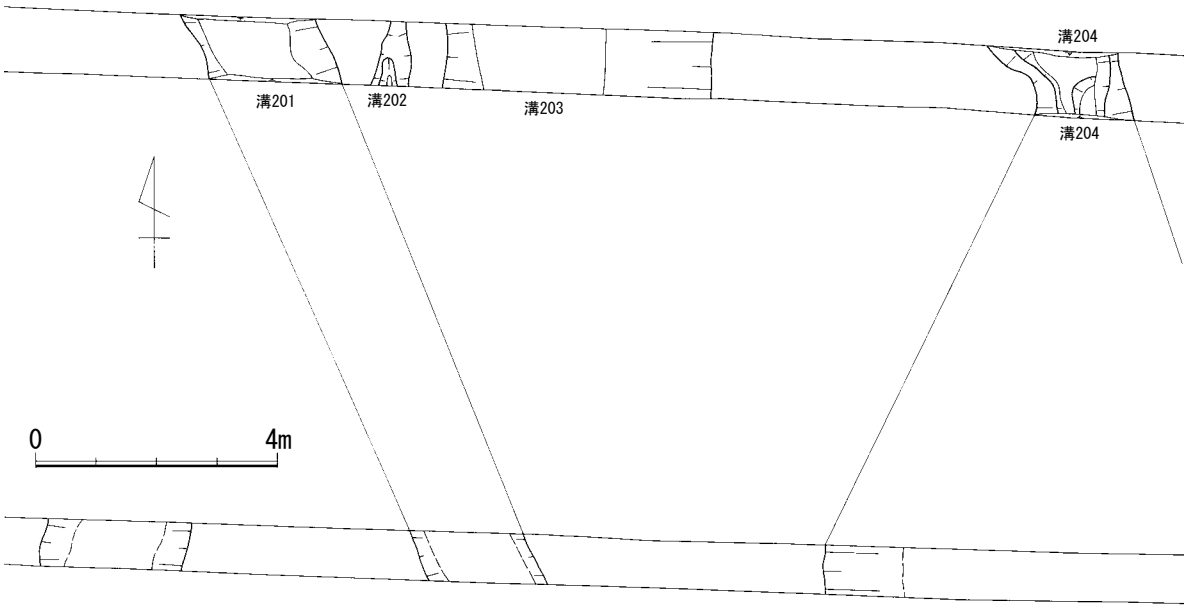
③　４区で検出した遺構

調査区の西端部にあたる４区では２条の大規模の溝や竪穴住居跡が検出されたほか小規模な溝やピットなども散見された。

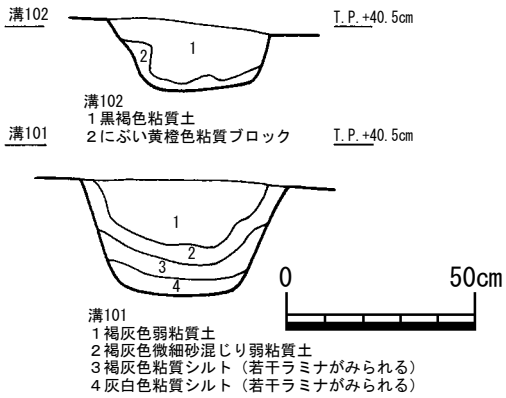
溝404（第９図、第11図、図版５）上幅約2.2ｍ、底幅約0.8ｍ、深さ約0.8ｍを測る南北方向の溝である。埋土は流水堆積層である。出土遺物から６世紀後半頃のものと判断される。等高線に平行に走る深い溝である。丘陵を流下する雨水を集める機能をもつものと推測される。２区で検出された溝201と平行して造られたものである可能性がある。



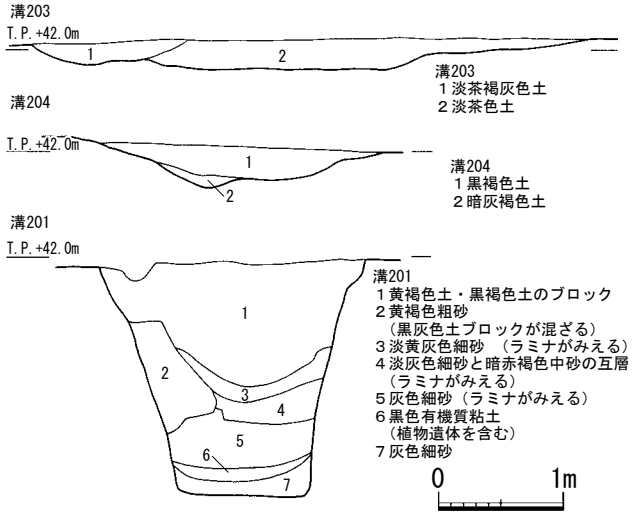
第５図　１区の遺構平面図



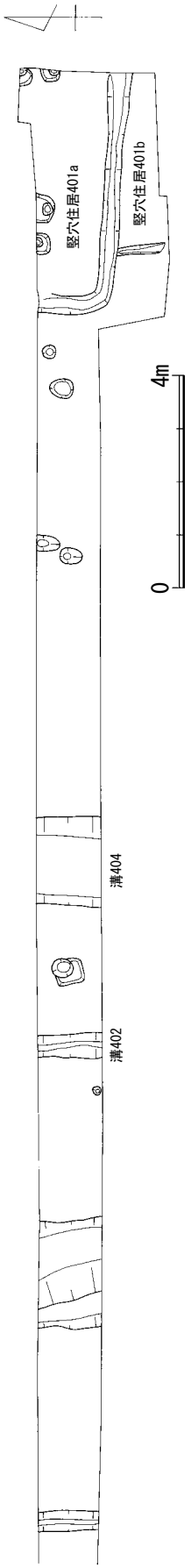
第６図　２区の遺構平面図



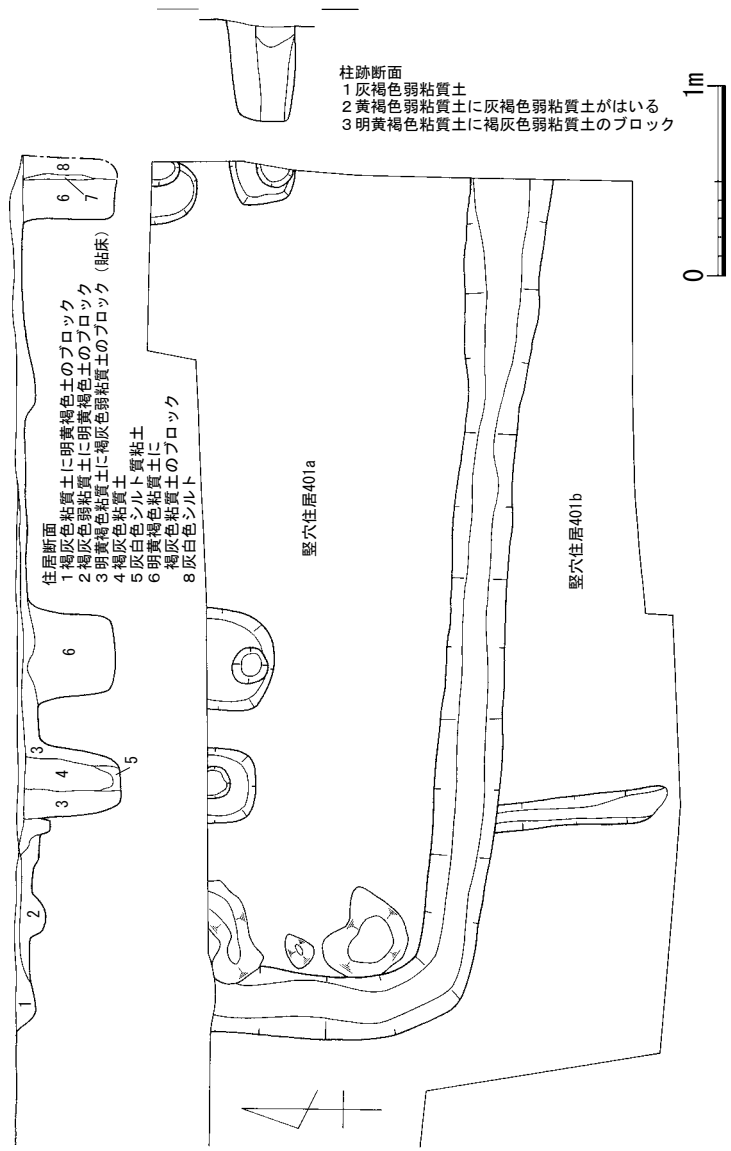
第７図　１区の遺構断面図



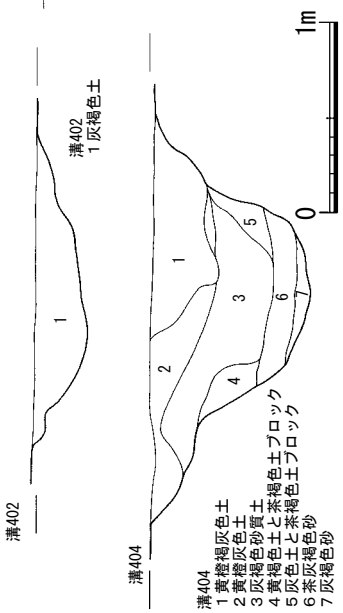
第８図　２区の遺構断面図



第９図　４区の遺構平面図



第10図　竪穴住居401平・断面図



第11図　溝404断面図

溝402（第９図、第11図）幅約1.6ｍ、深さ約30㎝を測る緩やかな傾斜の法面をもつ南北方向の溝である。埋土は暗褐色砂質土である。出土遺物はない。

竪穴住居401（第10図、図版４図、図版５）　２棟の竪穴住居跡が重複して検出された。住居跡の新旧関係は、401ａが新、401bが古である。

竪穴住居401ａは、隅丸方形プランの竪穴住居跡の北西部分である。検出長は、南北2.0ｍ前後、東西4.5ｍ前後を測る。埋土は地山面から上部に３～４㎝を残すのみであり、貼床のための粘土（褐灰色粘質土に地山層である明黄褐色粘土のブロックが入る）を検出した。壁溝は、幅30～40㎝、深さ４～13㎝を測る。

竪穴住居401ｂは、その範囲の大部分が竪穴住居401ａによって破壊されており、壁溝と床面の一部南北約１ｍ、東西約3.3ｍの範囲を検出したのみである。壁溝は、西辺の一部約１ｍの長さを検出した。幅15㎝前後、深さ７㎝前後を測る。

２棟の竪穴住居跡の主柱穴は、竪穴住居401ａの範囲の中で４個検出された。柱穴１は、直径約35㎝、深さ約50㎝を測り、ほぼ中央部に直径約16㎝の柱痕が残る。柱穴２は、直径約50㎝、深さ約42㎝を測り、南端に直径約18㎝の柱痕が残る。柱穴３は、直径32㎝以上、深さ約50㎝を測り、西端に直径約10㎝以上の柱痕が残る。柱穴４は、直径約36㎝、深さ約50㎝を測り、南部に直径約18㎝の柱痕が残る。

以上４個の柱穴が竪穴住居401ａと竪穴住居401ｂのいずれに帰属するものかを明確に判断することはできない。

出土遺物は竪穴住居401ａ、竪穴住居401ｂともに極めて少ないが、６世紀後半の所産と考えられる。

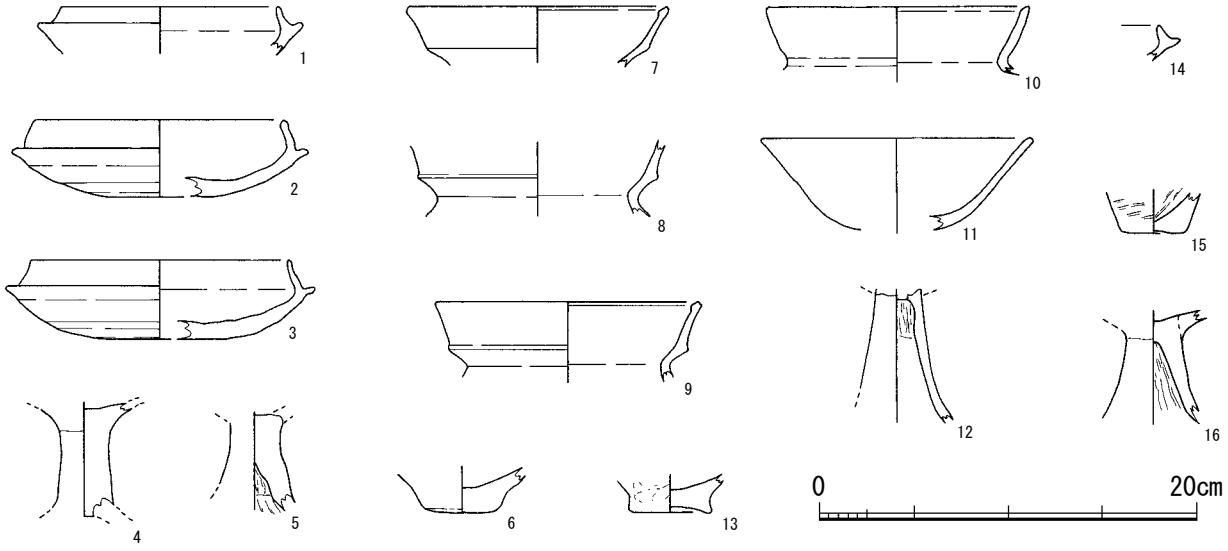
第４節　出土した遺物

①　**１区出土遺物**（第12図、図版６）

１区の西部で確認した谷地形の最下部埋土であるは黒色有機質土から、布留式前半期の古式土師器がまとまって出土した。また落込み101は、谷地形の埋没土最終段階で形成されたものである。その他に調査区東部で確認した溝・ピットから若干の遺物が出土している。

遺物包含層出土（１～６）　１～３は須恵器の坏身である。１の立ち上がりは、短く内傾し、端部はやや丸い。２・３より立ち上がり高（1.3㎝）は低く、口径（11.5㎝）も小さい。ＴＫ43程度に位置付けられる。２・３の立ち上がりは、内湾しつつ内傾し、端部は丸い。２は口径13.2㎝、器高4.0㎝。３は口径13.7㎝、器高4.2㎝。両者はＴＫ10に位置付けられる。４・５は土師器の高坏である。４の脚部は中実、内外面とも摩滅で調整不明である。５の脚部内面は絞り痕跡が残り、外面は摩滅で調整不明である。胎土に粗砂を著しく含む。６は弥生土器か土師器の底部である。胎土に粗砂を著しく含む。内外面とも摩滅で調整不明。

黒色有機質土（７～13）　布留式前半期の古式土師器がまとまって出土した。７～９は山陰系の甕である。内外面とも横ナデで仕上げる。７・９は口縁端部内面を肥厚させるが、同一個体の可能性もある。いずれも色調は灰白色(2.5Y8/1)を呈し、胎土に明赤褐色(5YR5/8)の細粒を含んでおり、搬入品である。10は布留系の甕である。口縁端部内面を若干肥厚させる。内外面とも摩滅で調整不明。11・12は高坏であり、同一個体と考えられる。11の坏部内面に横ハケ調整痕が残り、内外面横ナデで仕上げる。12の脚



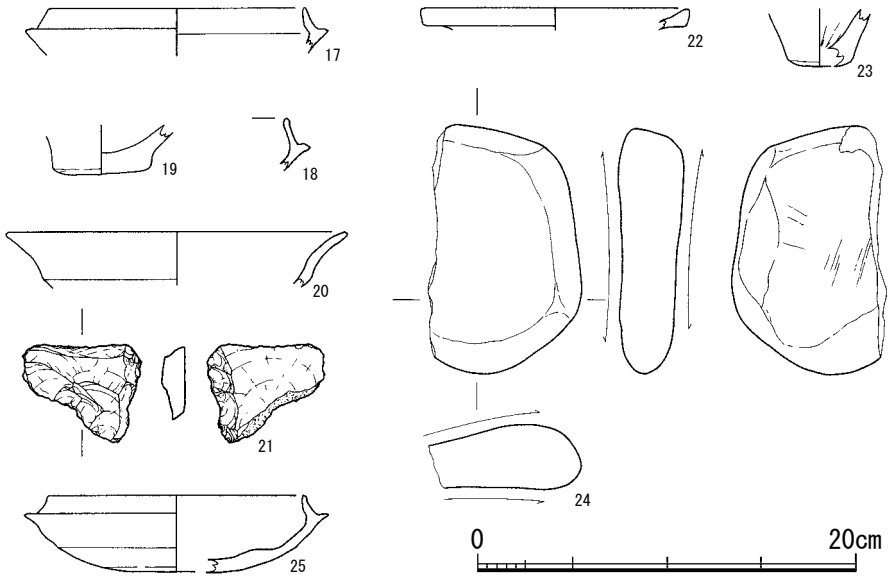
第12図　１区出土遺物実測図

部は内面上部に絞り痕跡、下部は横方向に強くナデ仕上げる。13は底部である。外面は二次焼成で赤く変色する。内外面とも摩滅で調整不明。

ピット104（14）　14は生焼けの須恵器坏身である。３㎝の細片であり法量は不明。立ち上がりは、短く内傾し、端部は鋭い。立ち上がり高1.0㎝。受部は短くやや上外方にのび、端部は鋭い。ＴＫ209程度に位置付けられる。

溝101（図版６上段）　須恵器の坏蓋片３点である。細片のため図化し得ていない。上２点の外面の稜線部は左が凹線、右がまるく痕跡的となる。口縁端部内面は、左上は丸く、右上は内傾する段をなす。両者はＭＴ85に位置付けられる。下１点の口縁端部内面は、内傾する段をなす。

溝102（15・16）　15は弥生土器の底部である。外面は二次焼成で赤く変色する。ドーナツ底、体部外面は叩き成形し、体部内面は板ナデ調整である。16は弥生土器の高坏である。外面は縦方向のヘラミガ



第13図　２区出土遺物実測図

キのようである。坏部内面は摩滅で調整不明。脚部内面は絞り痕跡をナデ仕上げる。弥生時代後期終末程度に位置付けておきたい。

② **２区出土遺物**（第13図、図版７）

２区では、４条の溝を確認しており、溝201・204から遺構の時期を示す遺物が出土した。

溝201（17～21）　17・18は須恵器の坏身である。17の立ち上がりは、内傾し端部はやや鋭い。立ち上がり高1.3㎝。受部は短くやや上外方にのび、端部はやや鋭い。５㎝の破片であるが、口径13.5㎝程度の大型品に復元できる。18の立ち上がりは、外反しつつ内傾し、端部は丸くやや肥厚する。立ち上がり高1.5㎝。いずれもＴＫ10～ＭＴ85程度に位置付けられる。19・20は弥生土器であり、混入品である。19は平底の底部である。体部は内外面ともナデ仕上げ。20は高坏であり、粗砂を多く含む。内外面は摩滅で調整不明。弥生時代後期後半に位置付けられる。21はサヌカイト石核である。縁辺に自然面を残す剥片を石核としたもので、表裏から合わせて４回の剥片剥離を行う。

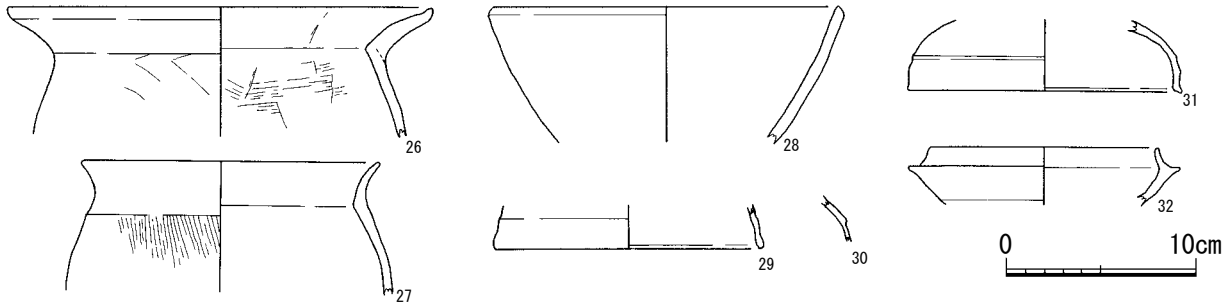
溝204（22～24）　22・23は弥生土器である。22は壷の口縁部で、内外面は摩滅で調整不明。23は平底の底部である。内面は板状工具ナデ、外面は摩滅で調整不明。24は砂岩の磨石であり、半分ほどが欠損する。川原石などの扁平な円礫をそのままに磨石とするもので、両面に使用痕跡が確認できる。

表面採取（25）　25は現代耕作土から出土した須恵器の坏身である。口径13.5cm、器高4.0cm。大型品で扁平である。立ち上がりは短く外反しつつ内傾し、端部はやや尖らせる。立ち上がり高1.0㎝。ＭＴ85に位置付けられる。

③ **４区出土遺物**（第14図、図版８）

４区東半部では、竪穴住居、溝、柱穴の遺構が確認した。竪穴住居401と溝404から遺構の時期を示す遺物が出土した。

竪穴住居401（26～30）　26～29は壁溝内の埋土、30は貼床からの出土である。26・27は土師器の甕である。26は口縁部横ナデ、体部外面は板ナデの後ナデ、同内面は板ナデである。27は口縁部横ナデ、体部外面はハケ目、同内面はナデ仕上げである。外面は赤変し、煤が付着する。28は粗製の鉢と考えられ、微細～３mm程度の粗砂を多く含む。外面はやや赤変し、内面は褐色(10YR4/4)を呈する。口縁端部は丸くし、体部内外面ともナデ仕上げである。29・30は須恵器の坏蓋である。いずれも３cm程度の破片であり、29の径14㎝程度に復元できる。29の口縁端部内面は内傾する段をなす。30は口縁端部を欠損する。口縁と体部間の稜線は明瞭だがシャープさはない。いずれもＴＫ10程度に位置付けておきたい。



第14図　４区出土遺物実測図

溝404（31・32）　31は須恵器の坏蓋である。口径14.4cm。天井部はやや丸みを帯び、口縁と体部間の稜線は丸くシャープさはない。口縁端部は内傾する凹面である。ＴＫ10に位置付けられる。32は須恵器の坏　身である。口径12.0cm程度。たちあがりは短く外反しつつ内傾し、端部は丸い。ＴＫ43に位置付けられる。

第４章　まとめ

尺度遺跡の発掘調査は、大阪府農業技術センター(現・地方独立行政法人大阪府環境農林水産総合研究所食と緑の技術センター）の敷地内において実施した。当該センターは戦後の早い時期から丘陵部に本部や研究施設を建設し、丘陵裾部から低地部を耕作地として造成された。丘陵の２基の古墳や弥生時代の高地性集落の存在が伝えられてきたがその実態は明らかではない。

近年、本課においては、丘陵部において施設の建て替えなどにともなって確認調査を随時実施してきたが、これまで顕著な遺構、遺物を確認できなかった。丘陵裾部は耕地として活用され、これまで発掘調査が必要とする工事の実施はなかった。しかも大きな区画に整理されており、かつて大規模な造成がなされたことを示す現状であった。

今回の発掘調査は、これまで調査の手が及んでいなかった丘陵裾部から続く低地部の耕地の中に幅１ｍではあるが、長さ約200ｍにわたって調査区を東西に設定した。ほとんどの箇所において造成時に上部を削られ、遺物包含層は遺存しておらず、検出できた遺構も上部を大きく削平されていた。しかしそれにもかかわらず、これまで知られていなかった多くの事実を確認することができた。

西端の丘陵裾部では、南側の丘陵を大きく開析した谷の一部と考えられる谷地形を確認することができた。ここからは布留式前半期の古式土師器が出土した。南阪奈道路の発掘調査で検出された方形区画を中心とする竪穴住居による巨大な集落との関連が想定される。

また、低地部の調査では古墳時代後期の遺構が散見された。とりわけ幅２ｍで、遺存していた深さが２ｍ近くに及ぶ南北方向の溝（溝201）の存在意義は大きいと考えられる。等高線に平行する形で掘削されたこの溝は、丘陵上に降る雨水を集める機能をもつものと考えられるが、なぜこのように深い溝が必要であったのか、一帯の地形とのかかわりで今後解明しなければならない課題である。

さらにその120ｍほど西側でも幅2.2ｍ、深さ0.8ｍの溝（溝404）が検出されている。この遺構も上部を大きく削平されており、溝101と同様な機能をもつものと想定される。２条の深い溝が平行して掘削された意味の解明も今後の課題である。

また、調査区の東端では重複した２棟の竪穴住居を検出した。隅丸方形プランを呈する古墳時代後期、６世紀後半の所産であり、溝101、溝404とほぼ同時期のものである。他の遺構と同じく上部を大きく削られており、壁の立ち上がりはわずかに確認できたのみで、壁溝と床に貼られた粘土層によって検出できた。２基の竪穴住居が重複して検出されたことは、この地で安定して集落が営まれていたことを示している。竪穴住居が検出された場所は南阪奈道路の発掘調査で、古墳時代初頭の方形区画が検出された地点に近い。尺度遺跡の中でもっとも居住域して条件に恵まれていた場所にあたっている。そして、この西側の深い溝が掘削された地区が同時代の耕作地であった可能性がある。

なお、今回の調査で出土した須恵器は少量であるにもかかわらずほとんどがＴＫ10、ＭＴ85、ＴＫ43の型式に相当する。６世紀中頃から後半に比定さるものである。このことからある程度の時期幅をもちながらも、今回の調査で検出された主要な遺構を古墳時代後期のもと理解した。

尺度遺跡の今回の調査では、以下のことが明らかになった。

①　羽曳野丘陵の裾部から開析谷の一部を検出し、その下層から布留式前半期の古式土師器がまとまって出土した。

②　古墳時代後期の竪穴住居跡を検出したことから、同時期の居住域の一部を確認できた。またほぼ同じ場所に重複して住居が営まれることから、ある程度永続性があったことがわかる。さらに住居跡の埋土は上部を後世に削平され、わずかに数cm遺存しているのみであった。このことから付近一帯にはさらに住居跡が存在していた可能性が高い。

③　深度の深い、それに比べて幅の狭い南北方向の溝を、距離を隔てて２条検出した。どちらも等高線に平行に走る南北方向のものである。古墳時代後期の時期が与えられる。羽曳野丘陵に降った雨水を集水する機能をもつものと考えられる。この時期、付近一帯に排水のための体系的な施設が存在したことを予想させる。

④　本調査区一帯は後世に大きく削平されて遺構の保存状態はよくなかった。しかし検出された遺構の状況から判断して、本来さらに多くの遺構が存在し、古墳時代後期の居住域と農業生産の場を形成していたものと考えられる。

以上、断片的ではあるが、これまでの尺度遺跡の調査成果に重要な情報を付け加えることができたと考える。

報　告　書　抄　録

ふりがな	しゃくどいせき
書　　名	尺度遺跡
副　書　名	動物愛護管理センター（仮称）建設に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2016－４
編集著者名	山田隆一・小林義孝
編集機関	大阪府教育委員会
所　在　地	〒540 - 8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2016年11月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
尺度遺跡（しゃくどいせき）	大阪府羽曳野市蔵之内（おおさかふはびきの しくらのうち）	27211	71	34° 32′ 02″	135° 36′ 07″	平成27年11月12日から平成27年12月25日	224㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尺度遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居、溝	古式土師器、須恵器	古墳時代後期の竪穴住居と大規模な溝

要　約	羽曳野丘陵の裾部から低地部にかけて長さ約200ｍの調査区を設定。丘陵裾部では、谷地形の下部から古式土師器が出土。平地では多数の溝など検出。地形に平行して掘削された深さ２ｍの古墳時代後期の溝など検出。調査区最東部で古墳時代後期の竪穴住居を検出。

大阪府埋蔵文化財調査報告2016－4

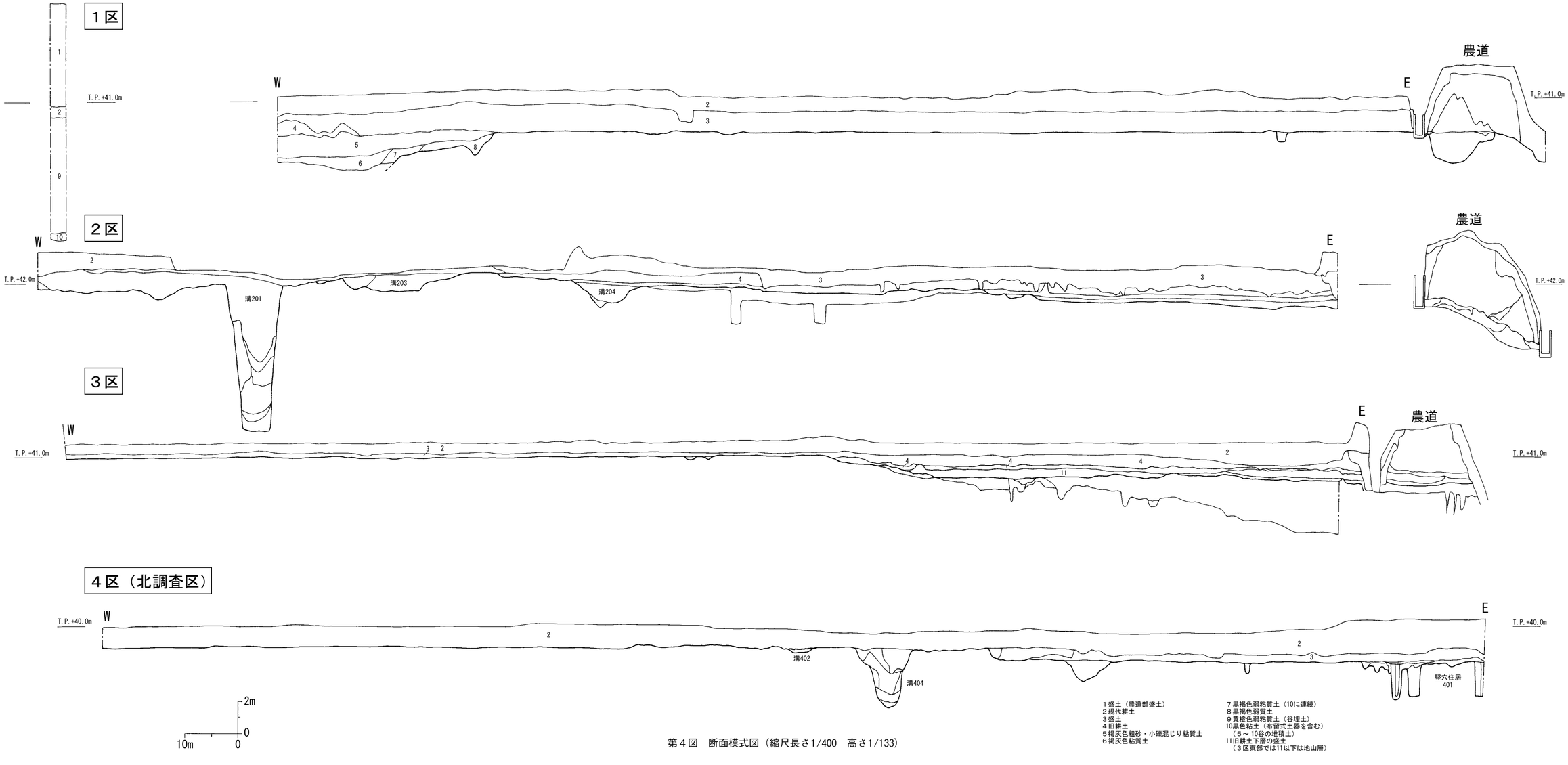
尺 度 遺 跡

－動物愛護管理センター(仮称)建設に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成28年11月30日

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷五丁目６番25号



１盛土（農道部盛土）
２現代耕土
３盛土
４旧耕土
５褐灰色粗砂・小礫混じり粘質土
６褐灰色粘質土
７黒褐色弱粘質土（10に連続）
８黒褐色弱質土
９黄橙色弱粘質土（谷埋土）
10黒色粘土（布留式土器を含む）
（５～10谷の堆積土）
11旧耕土下層の盛土
（３区東部では11以下は地山層）

第４図　断面模式図（縮尺長さ1/400　高さ1/133）

図　　版

図版1　検出された遺構（1区）

1区全景（東から）

溝101（南西から）

図版2　検出された遺構（2区）

２区全景（南西から）

溝201（南東から）

図版3　検出された遺構（3区・4区）

3区、4区全景

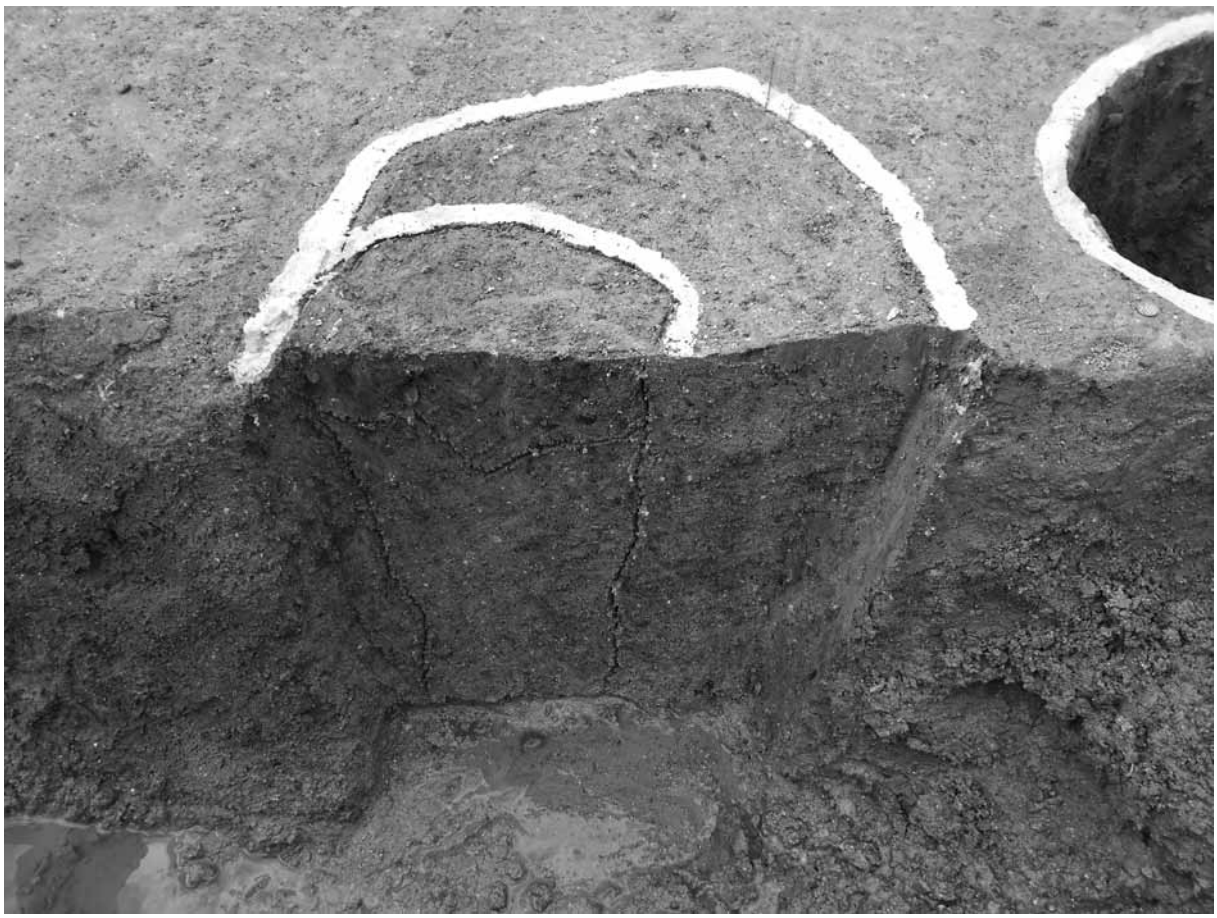
4区北部全景

図版4　検出された遺構（4区）

竪穴住居401（南東から）

竪穴住居401（東から）

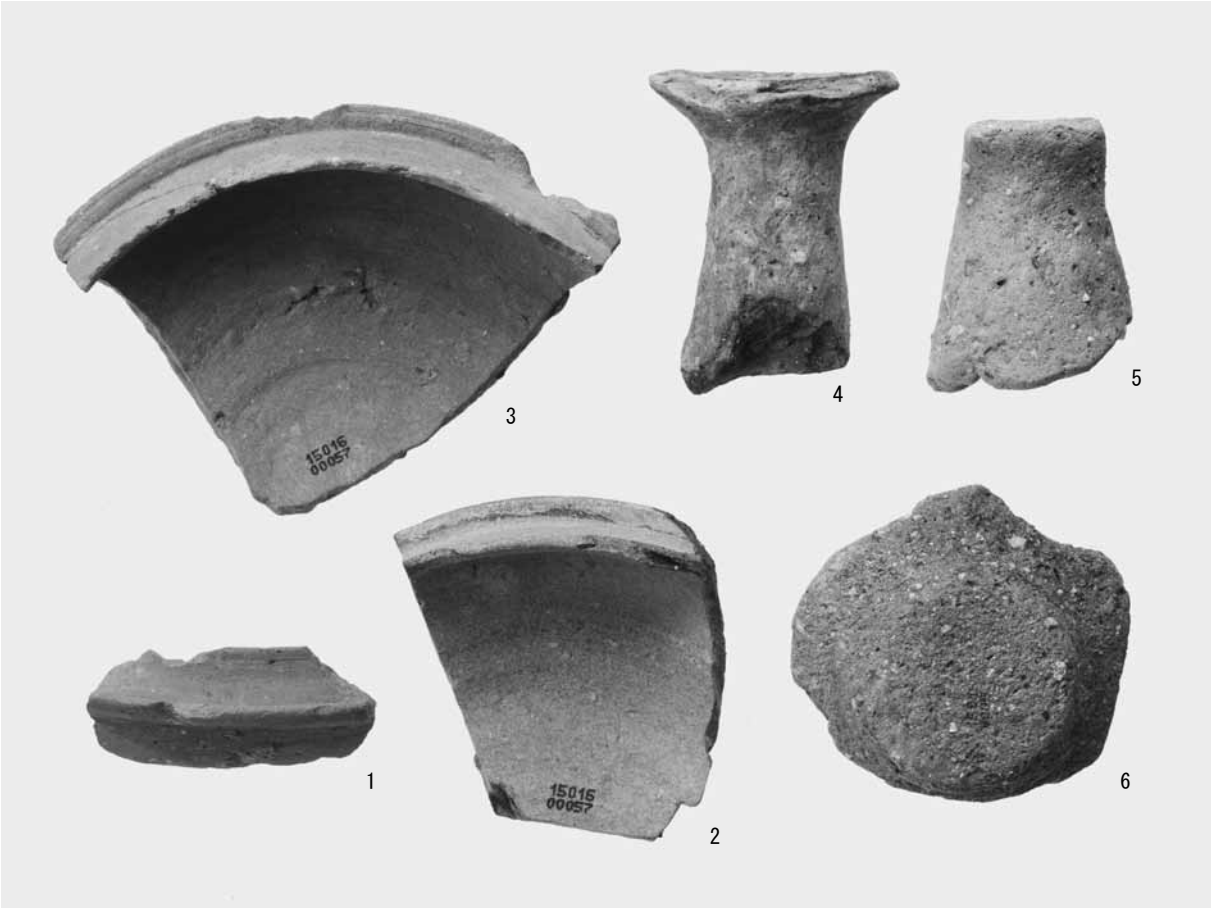
図版5　検出された遺構（4区）



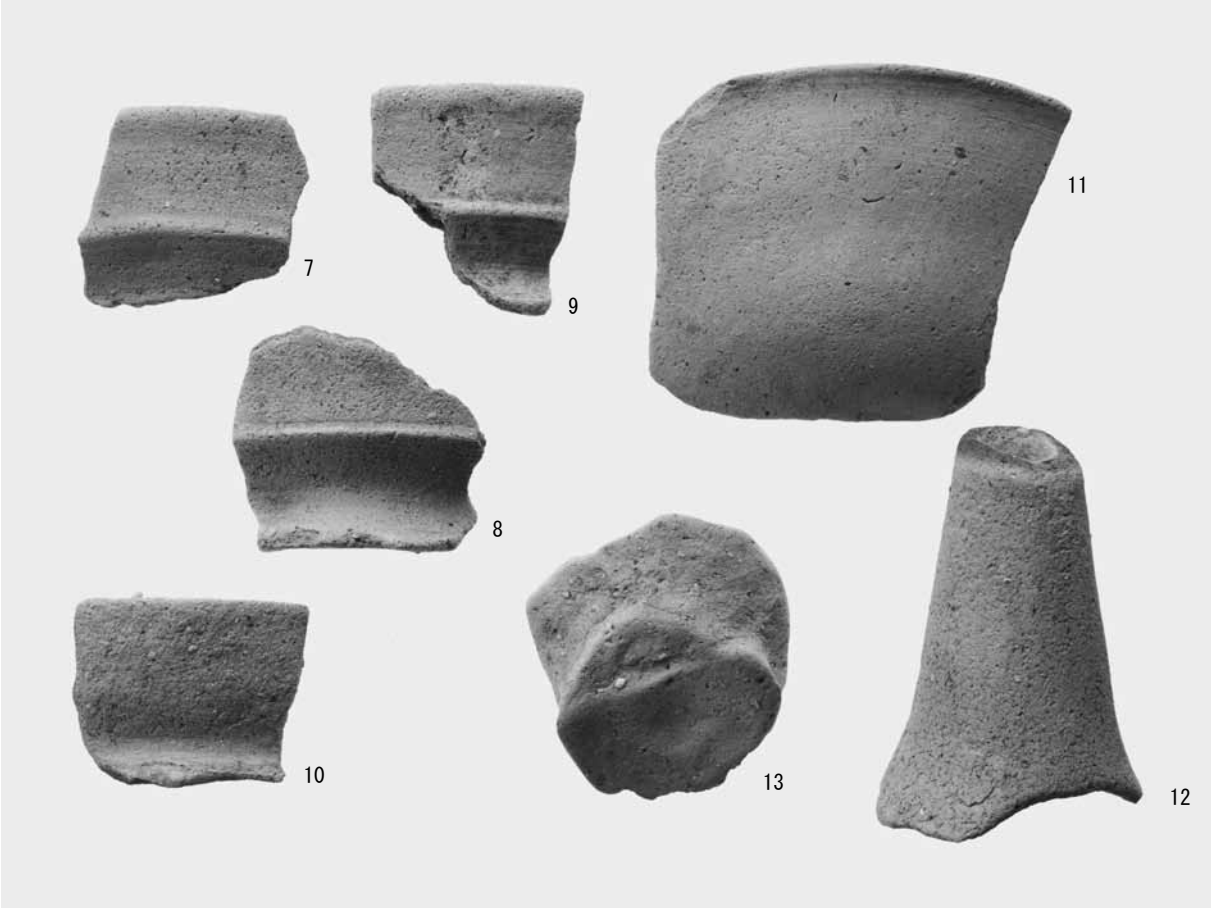
竪穴住居401主柱穴（南から）

溝404

図版6　出土遺物1

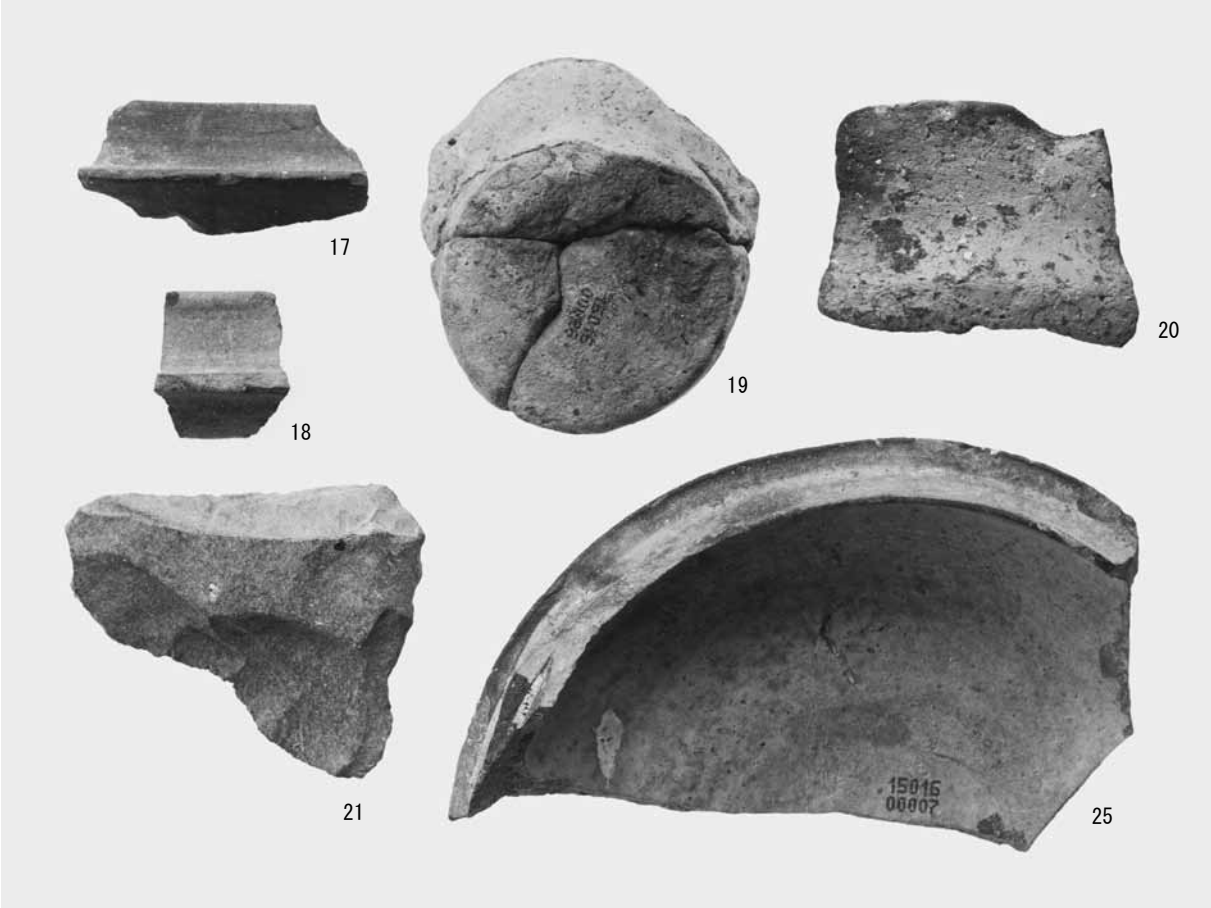


a. 1区　落込み101



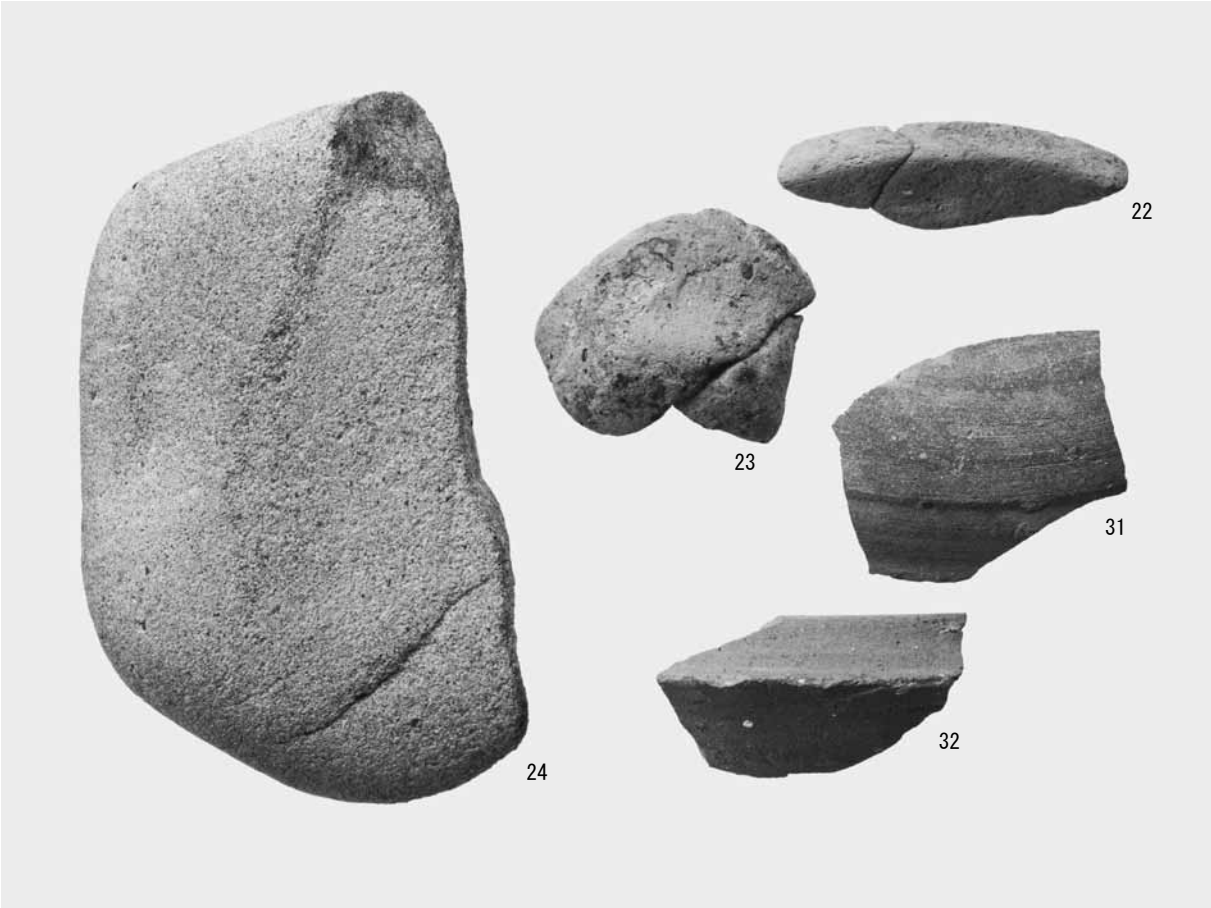
b. 1区　黒色有機質土

a. 1区　溝101・102、ピット104（溝101は左上3点、番号なし）



b. 2区　溝201、現代盛土

図版8　出土遺物3



a. ２区　溝204、４区　溝404

b. ４区　竪穴住居401